

索引 163

接触感染予防策 96
 接触予防策 101, 105
 セミクリティカル器具 56
 潜在性結核感染 110
 洗浄・消毒 56
 早期発見・早期治療 110
 ゾーニング 68
 速乾性手指消毒薬 40

タ行

ダイアライザ接続部ジョイントカ
 プラー 80
 耐性菌 45
 多剤耐性菌 96
 中東呼吸器症候群 (MERS)
 126
 通常疥癬 105
 ツベルクリン反応 110
 定期健康診断 145
 ディスポーザブルエプロン 39
 ディスポーザブルガウン 39
 ディスポーザブルキット 11
 ディスポーザブル手袋 39
 定例教育プログラム 155
 適正照度 65
 手袋 → ディスポーザブル手袋
 デング熱 124
 透析液水質基準 79
 透析液濃度の確認 8
 透析機械室 71
 透析用水の配管 77
 鳥インフルエンザ A (H5N1)
 126
 鳥インフルエンザ A (H7N9)
 126

ナ行

日本脳炎 124
 ノロウイルス 101, 149
 ノンクリティカル器具 56

ハ行

肺炎球菌ワクチン 130
 配管の消毒 78
 肺結核 153
 針刺し 151
 ヒト T リンパ球向性ウイルス 1
 型 → HTLV-1
 飛沫核感染予防策 101
 飛沫感染 32, 43
 標準予防策 2, 37, 155
 微粒子用マスク 116
 → N95 マスク
 風疹 149
 プレフィルドシリンジ製品 11
 ベッド固定 82
 ベッド配置 74
 保菌状態 33
 保健所への届け出 110, 154
 ポピドンヨード 53

マ行

麻疹 149
 マスク → サージカルマスク
 マスク → 微粒子用マスク
 マスク → N95 マスク
 マラリア 124
 滅菌 56

164

ラ行

流行性角結膜炎 149
 流行性耳下腺炎 149
 労災 (労働災害) 151

ロタウイルス 149

ワ行

ワクチン接種 33, 130

平成 27 年 3 月 31 日 発行

透析施設における標準的な透析操作と感染予防に関するガイドライン (四訂版)

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業
 HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究 (H24-エイズ-指定-002)
 HIV 感染患者における透析医療の推進に関する研究

協力 日本透析医会 日本透析医学会
 日本臨床工学技士会 日本腎不全看護学会

発行 公益社団法人 日本透析医会
 会長 山崎 親雄

事務局 〒101-0041
 東京都千代田区神田須田町 1 丁目 15 番 2 号
 濱路建物ビル 2 階
 TEL 03-3253-6471

印刷所 株式会社 三秀舎
 〒101-0047
 東京都千代田区内神田 1-12-2
 TEL 03-3292-2881

11

病病・病診連携の地域モデルの構築（診療連携システム開発に関する研究）

研究分担者：横幕 能行（国立名古屋医療センター）

研究要旨

多くの医療・福祉機関との連携のため、専用光回線の敷設を必要としない Information and Communication Technology (ICT) を用いた web conference system (支援ネットワーク) を構築した。年間 365 日 24 時間の曝露時対応体制を整えることにより、慢性透析患者の地域透析クリニックでの受入を可能とした。また、ICT は、当院から遠隔地で療養生活を送る HIV 陽性者、家族およびケアチームの状況把握、療養中に発生した問題の即時対応および予測される問題に対する先行的介入も可能とした。患者数、医療資源が少ない疾病の医療体制整備に ICT は活用を検討すべきツールである。

研究目的

エイズ診療拠点病院整備事業の中で HIV 感染症診療に従事してきた医療機関はほとんどが地域の高次機能病院である。近年、抗 HIV 療法による患者の生命予後の劇的な改善により、HIV 陽性者がこれまで HIV 感染症の診療機会を有してこなかった生活圏における一般の医療・福祉施設を利用する頻度が増加している。これら施設に対し、HIV 感染者の受入を依頼する場合、前年度の解析から、①HIV 感染症の知識不足、②HIV 感染者の受入経験欠如、③診療報酬上の問題（認識不足）、④曝露時対応の不備、⑤高次医療機関の受入体制欠如、⑥他の医療機関（療養型病床）の受入体制欠如といった問題から受入を断られることが多い。実際に HIV 感染症診療拠点病院から遠方にある施設においては、物理的にも曝露後速やかに対応の要否を判断し、曝露時対応を行うことは困難である。

これまで、愛知県内の HIV 感染症診療実績のある病院間に専用光回線による telecommunication system (基幹ネットワーク) を構築し、重症エイズ患者やウイルス学的治療失敗症例等治療困難例のコンサルテーションを随時行うことを可能にした。基幹ネットワークでは高品位な通信が随時可能であるが、使用機材の関係から 4 施設間に限られるため、県内で HIV 感染者の療養に関与する可能性のある全医療・福祉機関にひろく同様の支援を行うことはできない。そこで、東海ブロック内の医療・福祉施設における診療支援のための web カンファレンス体制（支援ネットワーク）を構築した。

今年度は、曝露時対応や遠隔地での HIV 陽性者の療養支援に対する支援ネットワークの効果を検討した。

研究方法

- 1) 支援ネットワークによる曝露時対応体制の構築
Jabber Video for TelePresence (Cisco) 導入によって、提携医療機関との間に 24 時間曝露時対応可能な支援体制構築する。
- 2) 慢性透析移行患者における支援ネットワークの効果検証
愛知県内で居住地に近い透析クリニックで慢性透析を行うことになった日系ブラジル人 HIV 陽性者の症例から支援ネットワークの効果を検討する。
- 3) 遠隔地療養中の HIV 陽性者のケアチーム支援に対する効果検証
愛知、岐阜および三重県内で地域医療・福祉資源により療養支援を受けている HIV 陽性者の症例から支援ネットワークの効果を検討する

（倫理面への配慮）

患者プライバシー確保のため、症例解析には個人が特定されることのないように配慮を行う。

研究結果

- 1) 支援ネットワークによる曝露時対応体制の構築
【支援ネットワークのシステム概要】
近年、当院と愛知県共催の「愛知県 HIV 感染症カンファレンス」を県内医療・福祉機関に対する

HIV 感染症の診断および曝露時対応の研修機会としている。支援ネットワークによる曝露時対応を希望する場合は、このカンファレンスへの出席と初回内服の抗 HIV 剤を備えていることを条件とした。支援ネットワーク利用希望機関に対しては、Jabber Video for TelePresence 接続用のプログラムとログイン用の ID、パスワードを配布した。各医療機関では、カメラ付き PC または iPad にプログラムをインストールしログインすることで、支援ネットワークに接続することが可能になる。

【名古屋医療センターにおける対応体制整備】

対応は 365 日 24 時間可能とした。担当はエイズ診療科医師 2 名で、夜間・休日対応に iPad と WiFi ルーターを常時携帯することにした。平日の勤務時間帯はエイズ診療科、夜間・休日は救急外来を窓口とし、web を通じて被曝者とエイズ診療科医師が 1 対 1 で対応を相談できるようにした (図 1)。

2) 慢性透析移行患者における支援ネットワークの効果検証

【症例】愛知県内在住 30 代日系ブラジル人男性

【病名】HIV 感染症、糖尿病、慢性腎不全

【通院手段】名古屋医療センターには、自宅最寄り駅から公共交通機関で 60 分。維持透析クリニックには名古屋駅から通院する場合、最寄り駅から距離約 5km で公共交通機関なし。患者の自宅からは自転車約 10 分。

【言語】ポルトガル語。日本語は日常会話程度。名古屋医療センター受診時は兄が通訳。

維持透析を行うクリニックは名古屋大学医学部腎臓内科に依頼し、受入検討可能な病院の紹介を受けた。透析クリニックにおける事前講習と近隣総合病院の腎臓内科の協力により、HIV 感染症の知識不足、診療報酬上の問題および高次医療機関の受入体制についての問題は解決されたが、曝露時対応と非常時のコミュニケーションの問題が課題として残った。しかしながら支援ネットワーク利用の提案によりそれらの問題も解決され、受入が決定した。

なお、言語の問題は愛知県医療通訳システム利用を提案したが、本システムで派遣される通訳に

対し交通費は支給されておらず、今回依頼する透析クリニック所在地への派遣時には、立地条件等から通訳者が相当の交通費を負担しなければならないことが問題となった。この問題についても、当院に通訳者を派遣し支援ネットワークを介したサービス提供を行うことで解決された (図 2)

3) 遠隔地療養中の HIV 陽性者のケアチーム支援に対する効果検証 (図 3)

2015 年 1 月末時点で支援ネットワークによる支援を実施中の事例の中から名古屋市外の症例の一部を提示する。

【症例】岐阜県東濃地域在住 40 代女性

【病名】後天性免疫不全症候群、知的障害 (療育手帳 A)

【家族構成】母 (同居)、長男 (婚外子、施設入所中)

【社会資源】

医療機関：名古屋医療センター (エイズ診療科)、近隣県立高次総合病院 (精神科)

介護・福祉施設：訪問看護、総合福祉施設内障害福祉センター (通所)

【当院通院手段】自宅最寄り駅から公共交通機関で約 40 分

民間賃貸住宅で高齢の母親と同居中であるが、母親体調不良を理由に受診予約頻度増加あり、地域ケアチームとの連携強化と地域医療機関での受診環境整備のために支援ネットワークの利用を提案した。居宅でのケア会議に加え本人および母親の状況変化が即時可能となった。

【症例】愛知県名古屋市外在住 40 代男性

【病名】後天性免疫不全症候群、HIV 関連神経認知障害、発達障害

【家族構成】母、妹 (同居)

【社会資源】

医療機関：名古屋医療センター (エイズ診療科)、往診医、地域の公立総合病院

介護・福祉施設：訪問看護、訪問入浴、訪問リハビリ

【当院通院手段】最寄り駅まで介護タクシー。最寄り駅から公共交通機関で約 60 分。家族同伴。

居住地の医療・福祉機関の良好な協力の下、家

族同居で在宅療養継続中である。在宅療養移行後約2年経過し、居宅訪問時に生じた問題への対応や今後独居となった場合の療養環境整備の依頼あり支援ネットワーク利用を提案した。在宅療養支援チームとの定例カンファレンスの中継により関係する全職種が情報を共有し解決策を提案できる体制を構築した。

【症例】三重県北勢地域在住 70 代男性

【病名】HIV 感染症、心筋梗塞後心不全、脳梗塞後遺症、前立腺肥大症（自己導尿）、梅毒

【社会資源】

医療機関：名古屋医療センター（エイズ診療科）、開業医、民間病院、公立高次総合病院

介護・福祉施設：訪問看護、訪問介護、地域包括支援センター、配食サービス

【当院通院手段】最寄り駅までタクシー。最寄り駅より公共交通機関で約60分。訪問看護師同伴。

在宅療養移行後7年経過し、居住地の医療・福祉施設連携体制も構築され名古屋医療センターには半年に一度の通院のみである。しかしながら、今年度は体調不良により救急車で居住地域の公立高次総合病院に3回搬送され救急外来受診後の療養の場の確保に難渋したとの報告があった。そこで、急変時即時情報共有と対応を可能にするために支援ネットワーク利用を提案した。居宅および地域主治医の医療機関での機器設定を行った。平常はケア会議中継などで情報共有をはかるとともに急変時は即時情報提供を可能とする方針となった。（図4）

【症例】三重県北勢地域在住 60 代男性

【病名】後天性免疫不全症候群、トキソプラズマ脳症、進行性多巣性白質脳症、B型肝炎

【家族構成】妻（同居）。娘、娘婿（別居）

【社会資源】

医療機関：居住地開業医（往診）

介護・福祉施設：訪問看護、訪問介護、地域包括支援センター

【当院通院手段】最寄り駅までタクシー。最寄り駅より公共交通機関で約60分

車いす移乗までの状態で在宅療養に移行した。通院負担を考え、居住地開業医の往診のみで治療

継続する方針となった。しかしながら、日常診療で対応する機会のない疾病を多種合併しており居住地主治医より状態把握に対する不安が強く示された。そこで、支援ネットワーク利用により在宅療養支援を行う方針となった。

【まとめ】

支援ネットワーク利用により遠隔地であっても居住時での療養継続を可能にした。また、同時に曝露時への対応も行っている。長期療養患者においても、地域のケアチームと継続的に情報共有を行うことにより、将来必要と予想される支援内容の検討と対応を連携して実施可能となった。

考察

2014年末時点で、名古屋医療センターには約1300名のHIV陽性者が定期通院している。約1200名が愛知県内、そのうち約600名が名古屋市内に居住している。その他は三重県北勢地域や岐阜県西濃、東濃地域に居住している。この様な現状の中、支援ネットワーク利用中の医療機関を含め、実際に曝露時の対応を求められることは、実は年間を通じて数件である。また、不測の事態への対応を求められる事もほとんどなかった。すなわち、支援ネットワークの最も大きな意義は、名古屋医療センターによる支援の保証による心理面での安心感の提供にあり、実際にHIV陽性者を受け入れた医療関係者からも裏付けられていた。ICTは経験の少ない疾病の罹患者の治療に従事する医療者の心理的な負担感を軽減することが可能である。

また、ICTにより地域医療者と後方支援病院で診療に従事する多職種との連携が可能かつ容易になる。HIV陽性者の予後は非常によく、要支援・介護となった場合にもほとんどの場合長期生命予後が期待できる。従って、療養生活の経過に従いHIV陽性者本人のみならず家族等を含めた種々の状況変化により、療養環境の再構築をはかる事態が発生する。即時の対応のみならず、地域の支援チームと随時情報共有をはかり先行的対応をはかることが望ましい。この際、最も障害となるのは物理的距離であるが、ICTを活用することにより解決することができる。

本来、行政圏が同じであれば居住地の違いによら

ず平等にサービスを受けることができる。しかしながら、医療通訳システムのように利用者が限られるようなサービスの場合必ずしもそうでない実情がある。日系ブラジル人症例では ICT を活用することにより、通常の運用では利用困難とされた場合であっても対応可能とすることができた。大都市圏で充実している種々の医療・行政サービスを地域でも利用できるようにする手段として ICT は有用である。

自己評価

1) 達成度

ICT を利用した曝露時対応体制を構築した。また、遠隔地での療養を要する HIV 陽性者、家族および医療サービス提供者の支援体制も構築した。HIV 陽性者の診療経験の少ない医療・福祉従事者が受入困難な理由としてあげる曝露時対応と診療経験不足による不安への対応を可能にすることで、地域で療養可能となった事例も増加しており、診療連携システムとしての ICT の有用性を実証できたと考えられる。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

現状では絶対数が決して多くない HIV 陽性者に対し、限られた医療資源の活用による診療・療養体制構築に対する ICT の有用性を示したことは、東海ブロックよりも陽性者数の少ない地域における医療体制構築の一手法として意義があると考えられる。

3) 今後の展望について

支援ネットワーク参加医療機関の増加により、HIV 陽性者が居住地で一般医療を受けやすい環境を整備する。症例の蓄積により、ICT より有効な活用方法を検討する。

結論

ICT は、地域の医療・福祉従事者の診療経験不足に起因する不安の軽減に有効である。長期療養を要する HIV 陽性者の増加が見込まれる中、地域のサービスチームの維持と支援にも有効であり、積極的活用を考慮するに値するシステムである。

知的財産権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

1. 原著論文による発表

Watanabe T, Hamada-Tsutsumi S, Yokomaku Y, Imamura J, Sugiura W, Tanaka Y. Post-Exposure Prophylactic Effect of HBV-active Antiretroviral Therapy Against Hepatitis B Virus Infection. *Antimicrobial agents and chemotherapy*. 2014.

Shiino T, Hattori J, Yokomaku Y, Iwatani Y, Sugiura W. Phylodynamic Analysis Reveals CRF01_AE Dissemination between Japan and Neighboring Asian Countries and the Role of Intravenous Drug Use in Transmission. *PloS one*. 9(7):e102633. 2014.

Ota Y, Hishima T, Mochizuki M, Kodama Y, Moritani S, Oyaizu N, Mine S, Ajisawa A, Tanuma J, Uehira T, Hagiwara S, Yajima K, Koizumi Y, Shirasaka T, Kojima Y, Nagai H, Yokomaku Y, Shiozawa Y, Koibuchi T, Iwamoto A, Oka S, Hasegawa H, Okada S, Katano H. Classification of AIDS-related lymphoma cases between 1987 and 2012 in Japan based on the WHO classification of lymphomas, fourth edition. *Cancer medicine*. 3(1):143-153. 2014.

Imahashi M, Izumi T, Watanabe D, Imamura J, Matsuoka K, Ode H, Masaoka T, Sato K, Kaneko N, Ichikawa S, Koyanagi Y, Takaori-Kondo A, Utsumi M, Yokomaku Y, Shirasaka T, Sugiura W, Iwatani Y, Naoe T. Lack of Association between Intact/Deletion Polymorphisms of the APOBEC3B Gene and HIV-1 Risk. *PloS one*. 9(3):e92861. 2014.

2. 口頭発表

Nakashima M, Kitamura S, Kurosawa T, Ode H, Kawamura T, Imahashi M, Yokomaku Y, Watanabe N, Sugiura W, Iwatani Y. Crystal structure of the Vif-inteaction domain of the anti-viral APOBEC3F. 23rd Congress of the International Union of Crystallography (IUCr2014), Montreal, Canada, Aug 5-12, 2014.

Yokomaku Y, Kito Y, Matsuoka K, Ode H, Matsuda M, Shimizu N, Iwatani Y, Sugiura W. CCR3 and CCR5 Dual Tropic HIV-1 is a Possible Major Escape Mechanism Frommaraviroc-Containing Antiretroviral Therapy. International Workshop on Antiviral Drug Resistance (Meeting the Global Challenge), Berlin, Germany, Jun 3-7, 2014.

Ode H, Matsuoka K, Matsuda M, Hachiya A, Hattori J, Yokomaku Y, Iwatani Y, Sugiura W. HIV-1 Near Full-Length Genome Analysis by Next-Generation Sequencing: Evaluation of Quasispecies and Minority Drug Resistance. International Workshop on Antiviral Drug Resistance (Meeting the Global Challenge), Berlin, Germany, Jun 3-7, 2014.

Nakashima M, Kitamura S, Kurosawa T, Ode H, Kawamura T, Mano Y, Naganawa Y, Yokomaku Y, Watanabe N, Sugiura W, Iwatani Y. Fine-tuned HIV-1 Vif-interaction Interface of Anti-retroviral CytidineDeaminase APOBEC3F. Cold Spring Harbor Laboratory Meetings & Courses Program, New York, USA, May 19-24, 2014.

Imahashi M, Izumi T, Imamura J, Matsuoka K, Ode H, Masaoka T, Sato K, Koyanagi Y, Takaori-Kondo A, Yokomaku Y, Sugiura W, Iwatani Y. Lack of Association between Intact/Deletion Polymorphisms of the APOBEC3B Gene and HIV-1 Risk. Cold Spring Harbor Laboratory Meetings & Courses Program, New York, USA, May 19-24, 2014.

魚田慎、今村淳治、古川聡美、大出裕高、横幕能行、杉浦互。次世代シーケンサを用いた Human Papillomavirus の検出及び解析方法の開発。第 28 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014 年 12 月。

重見麗、蜂谷敦子、松田昌和、今村淳治、渡邊綱正、横幕能行、岩谷靖雅、杉浦互。HIV-1 感染急性期における HIV 特異的な病態バイオマーカーの探索について。第 28 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014 年 12 月。

松田昌和、大出裕高、松岡和弘、蜂谷敦子、横幕能行、岩谷靖雅、杉浦互。IlluminaMiSeq を用いた HIV-1 近全長遺伝子配列解析の試み。第 28 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014 年 12 月。

岡崎玲子、蜂谷敦子、服部純子、湯永博之、渡邊大、長島真美、貞升健志、近藤真規子、南留美、吉田繁、森治代、内田和江、椎野禎一郎、加藤真吾、千葉仁志、伊藤俊広、佐藤武幸、上田敦久、石ヶ坪良明、古賀一郎、太田康男、山元泰之、福武勝幸、古賀道子、岩本愛吉、西澤雅子、岡慎一、岩谷靖雅、松田昌和、重見麗、保坂真澄、林田庸総、横幕能行、上田幹夫、大家正義、田邊嘉也、白阪琢磨、小島洋子、藤井輝久、高田昇、高田清式、山本政弘、松下修三、藤田次郎、健山正男、杉浦互。新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐性 HIV の動向。第 28 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014 年 12 月。

大出裕高、中島雅晶、河村高志、北村紳悟、長縄由里子、黒澤哲平、真野由有、栗津宏昭、松岡和弘、横幕能行、渡邊信久、杉浦互、岩谷靖雅。HIV-1 Vif における APOBEC3C/F 結合インターフェース。第 28 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014 年 12 月。

大出裕高、松岡和弘、松田昌和、蜂谷敦子、横幕能行、岩谷靖雅、杉浦互。Deep sequencing による HIV-1 臨床検体の近全長ゲノム配列解析系の構築。第 62 回日本ウイルス学会学術集会、横浜、2014 年 11 月。

中島雅晶、大出裕高、河村高志、北村紳悟、長縄由里子、黒澤哲平、真野由有、栗津宏昭、松岡和弘、横幕能行、渡邊信久、杉浦互、岩谷靖雅。空間的に異なる APOBEC3 結合インターフェースをもつ HIV-1 Vif。第 62 回日本ウイルス学会学術集会、横浜、2014 年 11 月。

大出裕高、松岡和弘、松田昌和、蜂谷敦子、服部純子、横幕能行、岩谷靖雅、杉浦互。Deep Sequencing による近全長 HIV-1 ゲノムの Quasispecies 解析と微少薬剤耐性変異の検出。第 16 回白馬シンポジウ

ム、熊本，2014 年 6 月。



図1 曝露時対応の支援

連携先医療機関で曝露事象が発生した場合、名古屋医療センターに連絡することでエイズ診療科医師と非曝露者が直接対応を相談、適切な処置を講じることができる。夜間、休日は名古屋医療センター救急外来が対応窓口となり、常時対応を可能にしている。

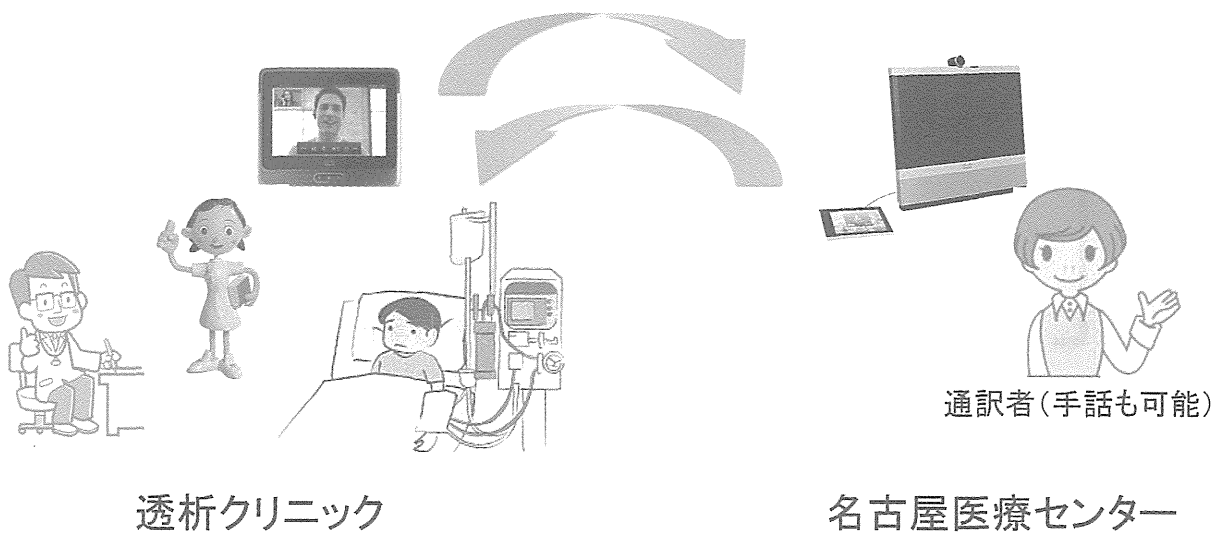


図2 ICT 利用による愛知医療通訳システムの活用

ICT 活用により医療通訳サービスの広域化も可能である。手話通訳の場合にも活用可能である。30 代日系ブラジル人男性の透析症例や豊橋市内クリニックでの外来治療継続を希望した 30 代日系ブラジル人女性の通訳利用時に活用を提案し、受入につながった。



図3 施設・地域のケア会議への参加

遠隔地で療養継続中の HIV 陽性者や家族の状況把握に活用可能である。定期的に行われるケア会議などに毎回医療スタッフが参加することは不可能であるが、ICT を活用してケア会議に参加することにより、全職種が情報共有可能となり適宜必要な専門的介入を行うことができる。

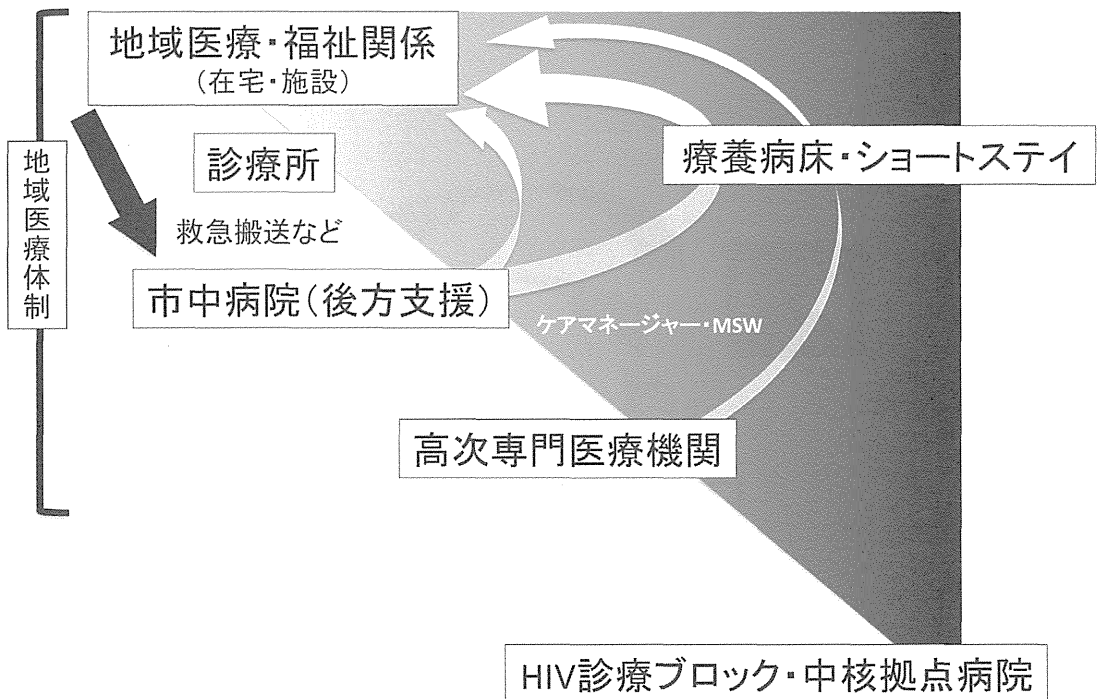


図4 ケアチームの継続的支援

地域で療養継続中の HIV 陽性者が高次医療を必要とした場合、特に救急車で搬送されるような緊急の場合には居住地の医療機関で診療を拒否されることは実際には少ない。しかしながら、その後、再び居住地域での在宅療養などに移行する場合、地域の療養病床やショートステイ施設への転院が困難で、地域のケアマネージャーや MSW が対応に苦慮するケースが多い。支援システムは構築が容易であり、地域医療体制を包括的に支援可能なネットワークを構築することが望ましい。

地域におけるHIV診療および福祉連携のあり方に関する研究

研究分担者：高田 清式（愛媛大学医学部附属病院 総合臨床研修センター・感染症内科）

研究協力者：井門 敬子（愛媛大学医学部附属病院 薬剤部）

村上 雄一（愛媛大学医学部附属病院 感染症内科）

中西 英元（愛媛大学医学部附属病院 感染症内科）

末盛浩一郎（愛媛大学医学部附属病院 感染症内科）

木村 博史（愛媛大学医学部附属病院 薬剤部）

藤原 光子（愛媛大学医学部附属病院 看護部）

中村真理子（愛媛大学医学部附属病院 看護部）

小野 恵子（愛媛大学医学部附属病院 医療福祉支援センター）

若松 綾（愛媛大学医学部附属病院 医療福祉支援センター）

中尾 綾（愛媛大学医学部附属病院 感染症内科）

研究要旨

地方の拠点病院と診察協力病院間の HIV 診療の充実および福祉連携について検討する目的で、診療の実態を調査研究した。地方の診療、福祉連携のモデルとして愛媛県および四国の HIV 診療と福祉の実態と施設の受け入れ体制を調査し、具体的な問題点・改善策を昨年に続き検討した。高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および調査にて、59%で治療等が良好なら不安はない（うち 11%は治療に関係なく不安はない）、77%が施設として受け入れ可能との結果を得た。さらに、今後も積極的に HIV に関する情報を希望する割合が 75%と良好な結果であった。また、四国内の各病院で HIV 診療の講演・啓蒙活動を行いつつ、HIV/エイズ患者は積極的に介護施設で分け隔てなく介護をしてもらうための試みとして昨年度作製した愛媛および四国での実用的な HIV に関するポケット冊子を改訂した。愛媛県等の地方では、高齢者のエイズ難渋例が多く、近い将来を考えると福祉連携など県全体で患者のサポートシステムを組むのがまさに緊喫の課題であると考えられる。

研究目的

地方の拠点病院と診察協力病院間の HIV 診療の充実および福祉連携について検討する目的で、HIV 診療の実態の調査研究を行った。愛媛県の HIV 診療や福祉を 1 つの地方のモデルとして、HIV 診療と福祉の実態と施設の受け入れ体制の調査研究を行い、さらに四国の他県の施設とも連携しつつ、四国全体の診療体制の充実を図ることを目的とした。

研究方法

地方の診療モデルとして愛媛県の拠点病院および診療協力病院の診療体制の構築・福祉連携について整備・充実を検討しつつ、高齢者施設における HIV 感染症等の受け入れ体制について意識調査を行い、具体的な問題点・改善策を検討した。今年度は昨年同様、高齢者施設を対象に HIV 感染症に関する研修会を行い啓

蒙に努めた。さらに介護に役立つよう、昨年度作製した HIV 感染予防対策に関するポケット冊子（愛媛の現況を内容に折り込んだ）の改定を行った。なお、患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにした。

研究結果

【1】 愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査

平成 26 年 12 月 16 日に愛媛県立美術館講堂において、県（健康増進課）の協力のもと県内の高齢者施設から現場の福祉・介護担当者に集ってもらい、HIV 感染症等に関する研修会を開催した。その結果、55 名の参加者が得られ、HIV 感染症を中心に初心者にも判りやすく講演を行った（講演者：高田清式）。今年度は、今後介護の面で問題になると考えられる HIV 関連認知機

能障害 (HAND) についても話題提供した。参加者からは「HIV について初めて勉強できた」「エイズ患者の介護がさしせまった問題であることを実感した」、「恐れてはいけない」などと比較的前向きな意見が交わされ、HIV の知識啓蒙とともに参加者各自に対して HIV 感染者を支援することの自覚を促すことが昨年同様に実現できた。研修会の終了時に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケート調査を行った。内容は、① HIV 感染をどう感じたか、② 自分の介護施設への入所をどう思うか、③ HIV 感染に対する将来の考えなどに関してであった。その結果 (回答数 46 名 : 約 84%)、① HIV 感染をどう感じたか (特に、恐れ不要と感じたか) に関しては、全く恐れ不要と感じたか) に関しては、全く恐れ不要と感じたか) に関しては、全く恐れ不要と感じており、研修会による啓蒙の効果もあってか比較的 HIV に関し前向きに捉えてくれていると考えられた (図 1)。

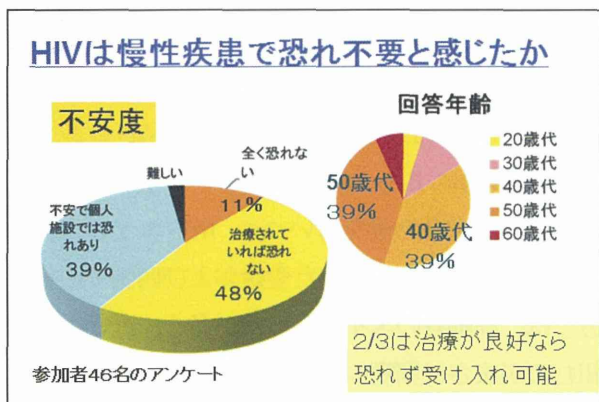


図 1 HIV 感染をどう感じたか (恐れ不要と感じたか)

なお、回答年齢は、40 歳代 39% と 50 歳代 39% で、主に現場で実践・指導的立場にある 40、50 歳代であった。

また、② 各自の介護施設への入所・受け入れをどう思うかに関しては、どんな状況でも受け入れる～不安は強いが受け入れるなどのある程度意識の差はあるが、77% が施設として受け入れ可能との意見を得た (図 2)。

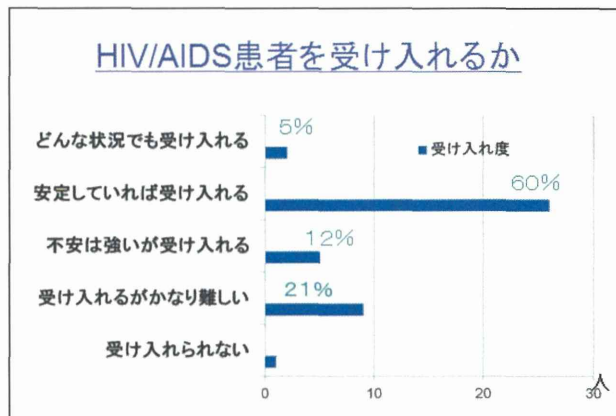


図 2 各自の介護施設への入所・受け入れをどう思うか

さらに、③ HIV 感染に対する将来の考えなどに関しては、今後も HIV に関する情報を希望するという意見が全員であり、特に積極的に希望する割合も 75% にあり、多くの現場の福祉・介護担当者は、HIV に関する知識の普及や収集に積極的であることが判った (図 3)。

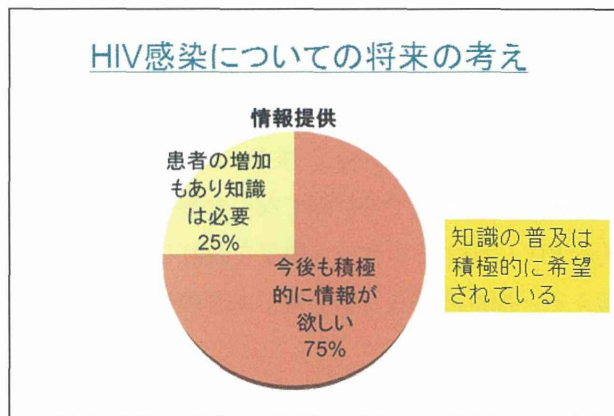


図 3 HIV 感染について将来の考えと知識の普及

【2】拠点病院などを対象とした教育講演会、意見交換 四国全体の HIV 診療レベルを向上させることならびに HIV 感染者の増加に伴う福祉連携の充実を目的に、HIV 診療の充実のための講演会として、『HIV 診療についての最近の話題と福祉連携』を演題として、高田清式が演者になり、大洲市立病院 (平成 27 年 2 月 25 日、参加者予定数 118 名)、および徳島大学医学部附属病院 (平成 26 年 6 月 13 日、参加者 185 名)、香川大学医学部附属病院 (平成 26 年 7 月 30 日、参加者 160 名) などの県内外の拠点病院・一般病院に出向き、各病院の医療スタッフ全体に知識向上と今後の連携意識向上を図った。また、保健所職員、拠点病院および多くの立場・職種の有識者 (メディア/学校/会社/商業などの立

場から選出) と HIV 感染予防対策に関する協議会を平成 26 年 11 月 4 日に松山市保健所にて開催し、HIV 感染に関する現況報告(演者: 高田清式)を行い、各自の立場での意見交換を行った。また、四国の HIV 診療・福祉の現実を多くの医療関係者に知ってもらう目的で、平成 27 年 2 月 4 日に愛媛県の HIV 診療ネットワーク会議(県全域の拠点病院が参加)を開催し、県内の他病院の HIV 診療状況を検討しあうとともに『愛媛県の HIV 感染対策の現況報告』というテーマで、講義を行った。

【3】在宅介護職員の実施研修

今後 HIV 患者の介護に直接あたってもらうことを想定し、計 6 名の在宅介護看護師に各々 1 週間ずつ研修会として、当院の HIV 患者の実施研修と講義・討議を行った。

【4】繁華街における一般向けの啓蒙イベント

多くの一般市民を対象に HIV に関する啓蒙の意味で(特に予防および偏見対策)、平成 26 年 11 月 30 日に愛媛県の繁華街である銀天街・大街道商店街にて HIV 予防啓蒙キャンペーンを行った(参加者: 保健所、拠点病院、学校関係者、メディアなど)。

【5】地域で実践的なポケット版小冊子の作製

昨年度に、地方で HIV/エイズ患者を積極的に介護施設で分け隔てなく介護をしてもらうための試みとして、介護時の HIV 感染予防対策なども折り込んだ、愛媛および四国での実用的な(愛媛や四国の現況や感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた) HIV に関するポケット冊子(18 x 10 cm 大)を作製し県内および四国の主だった HIV 診療施設に配布したが、今年度現場での意見も聞きつつさらに改訂した冊子を作製した。

考察

愛媛県をモデルとして、地方における HIV 診療および福祉連携に関する啓蒙とともに実態調査を行った。全国的に少子高齢化社会になりつつあり、高齢化が一步進んでいる愛媛県および四国は、今後の HIV 感染者の高齢化と福祉対策を考える上で代表的なモデル地区と考える。

当院では平成 26 年末現在累計 130 名以上の HIV 診療経験があり(県内の大半の HIV 診療を担当)、愛媛県の中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV 感染者・エイズ

患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年 10 名以上の新規感染者・患者が報告されており、かつ高齢者も多く HIV 診療の充実には早急に迫りつつある課題であると考えられ、そのため福祉を含めた総合的な四国の HIV 診療レベルの向上を目的として調査研究を行った。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢の HIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において平成 26 年末現在 50 歳以上の 8 割は発見時にエイズ患者であるという現実があり、介護福祉の連携は緊喫の課題である。高齢者の多い要因として、愛媛県をはじめとする地方においては、そもそも一般年齢層でも高齢者の比率が高い(愛媛県の 65 歳以上の高齢化率 28.8% 全国 8 位: 平成 25 年総務省調査)ことも背景にあると考えられるが、また県内の各地域における HIV 感染そのものの発見の遅れも一因と考えられる。そのため常に講演会でも早期発見のための留意点を強調しているが、患者の増加を抑制するための HIV 感染に対する予防啓蒙とともに、現実の感染者に対して各地域・病院において HIV 診療の向上と福祉の連携体制の充実を図ることは重要な課題であり、今後もさらに指導・教育および現況を把握するための調査研究に努めたいと考える。

今年度は徳島大学、香川大学の各附属病院に出向き、さらに県内の拠点病院のスタッフを集め HIV 診療ネットワーク会議として県内の HIV 診療病院と意見交換を行ったが、愛媛県や四国の他県ではいまだ HIV 診療が未経験や少数しか経験していない病院も多く、これらの病院への知識普及・啓蒙として、現在各病院単位での講演会、HIV 診療ネットワーク会議、診療経験の豊富な病院での見学などを着実に進めていく必要がある。

また、今年度も愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会を全県下に呼びかけて開催し HIV 感染者に対する支援者としての自覚を促すことができたことは意義深い。さらに研修会後の実態調査においては、参加者の約 3 分の 2 程度は「治療等が良好なら不安はない」(うち 11% は治療に関係なく不安はない) および 77% が「施設として受け入れ可能」との比較的好感触な結果を得たことは、緊喫の課題である福祉連携の拡大・充実を今後円滑に図り得る可能性が高いと考えられた。

さらにより具体化した福祉連携をめざし、今年度は

方で実用的な（愛媛や四国の現況や感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）HIV に関するポケット冊子を改訂した。今後現場での意見も聞きつつさらに改良した冊子を将来は作製したい。

高齢化にあたり、HIV 診療および福祉連携のあり方についてさらに検討を続け充実に努め、高齢化率の高い愛媛県のような地方においても、早期発見や重症患者の治療が十分に行われるように常々心がけて、エイズが進行し生命の危険が著しい患者を 1 人でも少なくしていくように努めていく必要があると考える。さらにその福祉連携のモデル地域として今後も研究・報告を全国に発信していきたいと考える。

結論

今回の調査・研究を通じ、各病院間および福祉施設との連携を状況把握し発展させるとともに、啓蒙活動を行った。今回の調査では、福祉施設において回答者の約 59%で治療等が良好なら不安はない、77%が施設として受け入れ可能との昨年以上の比較的好結果を得た。また、HIV 感染に対する知識や情報を希望する積極性も多く見受けられた。高齢化が深刻な愛媛県等の地方では、高齢者のエイズ難渋例が比較的多く、福祉連携など県全体で患者のサポート・連携システムを組むのが今まさに緊喫の課題であると考えられた。

健康危険情報

該当なし

知的財産権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

1. 論文発表

Watanabe T, Tokumoto Y, Hirooka M, Koizumi Y, Tada F, Ochi H, Abe M, Kumagi T, Ikeda Y, Matsuura B, Takada K, Hiasa Y. An HBV-HIV Co-infected Patient Treated with Tenofovir-based Therapy who Achieved HBs Antigen/ Antibody Seroconversion. Internal Medicine 53 : 1343-1346, 2014

井門敬子、木村博史、田中守、田中亮裕、高田清式、荒木博陽. 薬学部実務実習における抗 HIV 薬模擬服薬

体験を取り入れた HIV 実習の評価、日本病院薬剤師会雑誌 50 : 871-875、2014

2. 学会発表

高田清式、村上雄一、末盛浩一郎、中西英元、辻井智明、西川典子、木村博史、井門敬子、藤原光子、中村真理子、中尾綾、小野恵子、若松綾、HIV 関連神経認知障害（HAND）および他神経疾患における髄液中のネオブテリン量の測定と比較。第 28 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014 年 12 月

中尾綾、中村真理子、藤原光子、小野恵子、若松綾、木村博史、井門敬子、中西英元、村上雄一、末盛浩一郎、安川正貴、高田清式、当院における HIV 陽性患者への支援—心理面接と神経心理学的検査を通して。第 28 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014 年 12 月

中村真理子、藤原光子、川上真理子、中尾綾、木村博史、井門敬子、小野恵子、村上雄一、末盛浩一郎、高田清式、当院における HIV 感染症患者の喫煙状況と禁煙指導の現状。第 28 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014 年 12 月

渡辺崇夫、高田清式、徳本良雄、末盛浩一郎、村上雄一、日浅陽一、当院の HIV 陽性者における HBV 共感染の現状。第 28 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014 年 12 月

地域HIV看護の質の向上に関する研究

研究分担者：佐保美奈子（大阪府立大学 看護学部）

研究協力者：伊藤ヒロ子（公益社団法人大阪府看護協会 会長）

堀内 淑子（公益社団法人大阪府看護協会 専務理事）

中垣 郁代（公益社団法人大阪府看護協会 教育部）

古山 美穂（大阪府立大学 看護学部）

工藤 里香（兵庫医療大学 看護学部）

高知 恵（大阪府立大学 看護学部）

山田加奈子（大阪府立大学 看護学部）

北川末幾子（大阪府立大学 看護学部）

西口 初江（羽衣国際大学人間社会学部）

澤口智登里（大阪市北区保健福祉センター）

下司 有加（国立大阪医療センター 看護部）

王 美玲（大阪市立総合医療センター 看護部）

三田 洋子（市立堺病院 看護局）

下井 エミ（大阪府立・急性期総合医療センター 看護部）

久光 由香（近畿大学附属病院看護部 感染症看護専門看護師）

大野 典子（日生病院看護部 感染症看護専門看護師）

橋本 美鈴（大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター 感染管理認定看護師）

中村ゆかり（大阪府済生会 富田林病院 看護部）

熊谷 祐子（新世病院 看護部）

泉 柚岐（起業準備中 看護師）

鈴木 光次（藍の都脳神経外科病院 看護部）

池田麻衣子（大阪府立大和川高等学校・大阪府教育センター附属高等学校 養護教諭）

眞弓 靖子（大阪府立緑風冠高等学校 養護教諭）

賀登さおり（大阪府立成美高等学校 養護教諭）

繁内 幸治（BASE KOBE 代表）

武長 純子（特定非営利活動法人ピープルズホープジャパン）

研究要旨

平成 26 度は、介護職への啓発教材開発のために、研究協力者として大学で介護福祉士の養成にたずさわる教員が加わった。また高等学校養護教諭への啓発のために、大学で養護教諭養成にたずさわる教員が加わった。今年度は、HIV サポートリーダー養成研修・大阪 HIV ナースネットワーク会議を 2 回開催した。日本エイズ学会が大阪で開催され、プログラム委員として、公開講座・シンポジウム等を企画・実施した。大阪エイズウィーク 2014 のイベント企画にも参画した。高校生への出前講義を継続実施し、養護教諭向け DVD 教材を大阪府内の全高等学校に配布した。大阪における HIV 看護のネットワーク作り、高等学校との連携強化に向けて、大きな成果があった。

研究目的

大阪府をモデル地域として、拠点病院看護師の

HIV 看護の質の向上と一般病院、その他の看護職に HIV 感染症の知識獲得と認識の向上を図る。

研究方法

1) 合計 9 回開催した 3 日間の HIV サポートリーダー養成研修の内容を、研修後のアンケート調査により検討した。

(倫理面への配慮)

アンケート実施にあたっては、学会や報告書において内容を発表することについて了解を得たうえで、協力は自由意志であること、匿名での記入であること、希望時は調査結果を知らせること、個人情報の保護について説明をおこなった。

2) 2 回の大阪 HIV ナースネットワーク会議において、HIV 看護についての情報交換と症例について検討した。

3) 高校生への出前講義における学びと気づきについて、アンケート調査を実施した。

(倫理面への配慮)

アンケート実施にあたっては、学会や報告書において内容を発表することについて了解を得たうえで、協力は自由意志であること、匿名での記入であること、希望時は調査結果を知らせること、個人情報の保護について説明をおこなった。

研究結果

1) HIV サポートリーダー養成研修の評価・検討

資料として、これまでに開催した研修 9 回分のアンケート調査結果を添付する。これまでに 153 名の修了生を輩出した。

今年度も、3 日目の研修終了後に堂山地区の散策・食事をしながらの交流会を行い、ほとんどの研修受講者が参加し、性の多様性への理解が深まった。

表 1 HIV サポートリーダー養成研修の講義スケジュール

	I	II	III	IV
第 1 日	大阪の HIV 感染の現状	セクシュアリティ概論 思春期のセクシュアリティ (修了生担当)	HIV 陽性者の理解と初期対応	frisbee 自己紹介 研究班の取り組み
第 2 日	若者への HIV/AIDS 予防教育 感染拡大シミュレーション 粘土で性を表現してみよう		薬害エイズ	HIV の最新治療
第 3 日	DVD を使用した出前講義 (修了生担当)	コンドーム達人講座 (修了生担当) 装着実習 ネゴシエーション	HIV 陽性者の支援 (地域、ピア)	自由画 まとめ

HIV サポートリーダー養成研修の特徴

1. 座学だけでなく、楽しいアクティビティーを取り入れ、参加・体験型のプログラム
2. 体験し、表現し、伝える機会を提供する
3. 医師・看護師などの専門職だけでなく、HIV 陽性者・NGO も講師として招く
4. 研修終了後の堂山地区散策
5. フォローアップとして、HIV ネットワーク会議への参加
高校生への出前講義の見学
6. 修了生が講師になる機会の提供(研修、出前講義)



3 日間という短期間でありながら、セクシュアリティや HIV 陽性者に対する意識が変わり、自分自身の問題としてとらえるところまで態度の変化があった。3 日間の研修をすべて受講したものには、大阪府看護協会長から研修受講証明書を発行した。

アクティビティという楽しい要素を取り入れることによって、自己開示や他者の多様性や個別性を受容することができ、受講生の連帯感も高まった。社会全般からはなじみの少ない HIV/エイズ看護に向き合うためには、仲間からの支援が必須である。

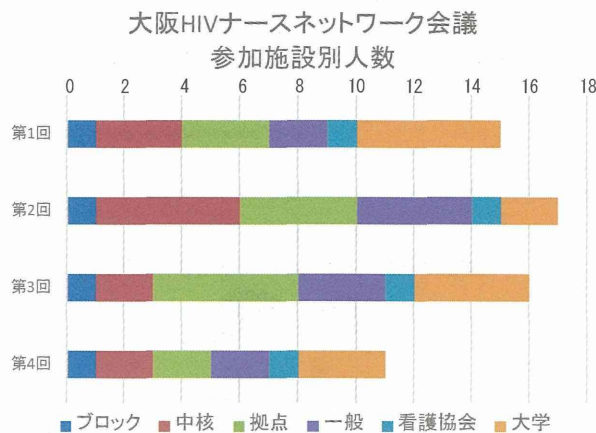
第 9 回目の研修では、受講生合計 26 名中 5 名が大学 4 年生であった。看護の仕事をする前の学部生のうちに「早期体験 (Early Exposure) 学習」として HIV サポートリーダー養成研修の受講は効果があった。受講生のほとんどは大阪府内の拠点病院に就職が決まっており、受講している他の看護師たちの交流も意義が大きかった。

研修修了生が研修の講義を行う機会も、今年はさらに 4 名に増加した。来年は新たな修了生に担当を依頼する予定である。

エイズ看護には、他の分野の看護にはない専門性があるが、同時に看護の土台ともなるセクシュアリティの多様性の尊重やプライバシーの保護、守秘義務、スタンダードプリコーション、チーム医療などの要素も大きい。エイズ看護に関する研修受講は、看護者にとっては看護の基本に立ち返るきっかけにもなり、日常の看護業務の遂行にあたっても有益である。

2) 大阪 HIV ナースネットワーク会議

参加者の所属施設は下図に示すように、拠点病院が半数以上を占めた。



HIV 看護は拠点病院であっても、なじみが薄く、気軽に症例について質問ができる場として、有意義であった。

3) 高校生への出前講義

今年度は、大阪府内高等学校への出前講義を15校に実施した。研究班で独自に作成したDVD教材「本気で CONDOMING」やスライドを用いて、おつきあいのマナー・同性愛の理解・STI 予防・HIV 検査について講義をおこなった。3日間研修以後に講師・アシスタントとして参加する看護職が増加した。

大阪府立 A 高校における出前講義について、講演終了後にアンケート調査を行った。講義対象は高校3年生 240 名で時期は 11 月であった。

出前講義による高校生の学びと気づきについて、自由記載部分をカテゴライズしたものを以下に示す。

HIV陽性者のイメージの変化

これまでとはひとことだったと自覚	大阪で特に増えていることは知らなかった 自分は感染しないだろうと勝手に思い込んでいた 自分には関係のないことだろうと安心していた
ひとことから自分のことになる	HIV/AIDSは本当に身近なものなんだと改めて実感した 今日、初めて、人ごとではないと思った HIVは普通の人は感染しないと思っていた
母子感染予防の理解	HIV陽性者でも出産できること 帝王切開などで母子感染が予防できる 母子感染するので出産できないと思っていた 母子感染の確率がひくい
感染後の人生について知る	感染したら、なんか絶望って感じがしていた 一生薬を飲み続けるのは大変なこと HIV感染しても、発症せずに元気に生活できる 感染しても、治療すれば、今までとわりの生活ができる
HIV陽性者への理解と支援	感染者の人たちについての理解を深めた 周りにHIV陽性者の人が居ても、絶対に偏見など持たずに、その人が普通に生活できるように手助けしたいとすぐく思った

コンドームによる具体的な予防行動

コンドームの必要性	コンドームの大切さがわかった 将来セックスをするときには、コンドームをきちんとつけたい コンドームの使い方のところはすぐ恥ずかしかったが、知っていないといけない HIV抗体検査が陰性であっても、コンドームが必要なことがわかった
コンドームネゴシエーション	コンドーム装着を自分からきちんと言う コンドームで予防するのは難しいのだとわかった
コンドーム装着の具体的な方法	コンドームの着用の仕方 コンドームの着け方は、日常生活で普通は聞いたりできない DVDでコンドームをはじめて見た

おつきあいのマナーに関する学び

理想のパートナーについて考える	自分の気持ちを一番に尊重してくれる人や気遣ってくれる人が本当のパートナー パートナーができれば、一緒に病気にかからないようにしたい 自分のことはもちろん相手のことも同じくらい思いやることができる人間になりたい
健康的な恋愛について知る	いい関係を築けるパートナーと巡り合えるようにがんばりたい 恋は楽しくないといけない、ということが印象的だった 相手を大事にできる素敵な恋愛をしたい どんな恋がいいのかなど、大切なことを知ることができた
別れのマナーを知る	別れる時、辛くても、どんなに相手のことが好きでも諦めないといけないと強く言われたのが驚いた、でも確かにそうだなと納得できた。
対等なおつきあいの方を知る	普段の付き合いも、自分と相手を対等にいること 二人で話をしたり考えたりすることが必要だ これからつきあうパートナーとどうしていったらいいのかなど、よりよいパートナーとの付き合い方がわかった 自分の理想のおつきあいがイメージできた どんなパートナーとおつきあいたいのかということがわかった 彼氏とお互いを理解し、信じ合える関係をめざしたい 自分も彼女がいるので大切にしたい

性行為についての慎重な態度

セックスにともなう責任の自覚	性交渉するとは、責任がともなうこと 今はセックスしても責任がとれないので、金銭面でも心の面でも準備ができてからしようと思う
安易なセックスを回避する	相手のことや自分のことを考えて、性行為をすることが大事だと知った 簡単な気持ちでセックスしたくない セックスはあいまいな知識と好奇心で絶対にしてはいけない 最近の若い子は、誰とでもすぐにセックスするので、HIVなど性感染症が増えていると当たり前のことだと思った
性欲のコントロール	自分の性欲だけで、セックスする男はよくない 自分の欲望のままじゃなく、相手を大切にしたい

性教育の必要性の自覚

大人に向かうための性教育	大人の日常生活にセックスが含まれていることを知った
	子どもだけでなく、大人にも性教育が必要
	大人になる前の時期に、正しい知識を得てよかった
	性教育がもっと必要
人生において性の大切さを知る	日本では、きちんと性教育がなされていない
	自分の体を守るためにも、エイズやつきあいのことを勉強できてよかった
	生きる上で、1時間で考え方が変わった
	これからの人生を歩んでいく上で、すぐくためになった

HIVに関する知識

HIVに関する知識の不足	知っているつもりが、まちがって理解していた
	特別な病気だと思っていた
	まだ十分な知識を持っていないことがわかった
HIV検査の知識	私自身、HIV検査を受けようかな、と思った
	匿名で検査できることは知らなかった
	きちんと予防をして、検査を受けて、安心できるようにしたい
HIVの治療の知識	子どもを作るときには、お互いに検査を受けたい
	治療費が、自費で月25万円と高額なこと
	治療の支援の制度があって、月1万円程度ですむ
	エイズの発症を遅らせる薬があること
	医療のシステムが整っていて安心した
	薬や母子感染しないようにできるので心強い

HIV 予防講座は、高校生が HIV を含む性感染をひとつごとではなく自分自身の問題として捉え、HIV 陽性者への支援にまで言及されていた。また、将来の恋愛・結婚・出産をイメージしておつきあいについて考える機会になっていた。

4) 介護職向けの DVD 制作について検討・企画・制作した。

HIV 感染は医学の進歩によって、慢性疾患の一つになり、適切な治療を継続することによって、HIV 陽性者が寿命を全うできるようになった。HIV 陽性者の高齢化により、介護福祉施設に入所を希望するものが増加することが考えられる。介護福祉施設が HIV 陽性者のケアについて理解し、受け入れがスムーズになるように、教育・研修が必要である。

研修用教材 地域 HIV 看護の質の向上に関する研究



介護職として、知っておきたい10のこと

HIV 感染と人権



- ・1998 (平成 10) 年
「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」
- 誤った知識や偏見などにより、HIV への感染を理由に退職の勧告、入園・入学の拒否、医療現場における診断拒否や無断検診などさまざまな差別や人権侵害が起こっています

出典：大阪府人権擁護の事業実施計画及び実施状況（平成 25 年度）

HIV 感染予防は

スタンダードプリコーションの範囲で十分です



日常のルールを守っていれば、
HIV 感染の心配はまったくありません

5) 「ティーンズを支援する人のための研修」を企画実施し、看護職・養護教諭など 37 名が参加した。

4. ティーンズを支援する人のための研修 ～おつきあいのマナーと HIV/AIDS 予防～

主催：大阪府立大学セクシュアリティ教育プロジェクト
この研修は、特定非営利活動法人 HIV と人権・情報センター 関西支部より講師を派遣していただき、実施します。



日時：平成26年8月20日(水)14:00～16:00
場所：大阪府立大学 I-site なんば 2階 S1研修室
〒556-0012 大阪市浪速区敷津東2丁目1番41号
南海なんば第1ビル Tel 06-7656-0441 (ウラ面地区)
対象：看護職・養護教諭・看護学生(30名先着順)
参加費：無料

参加者 37名
看護職・教育職

この研修では、ChotCAST なんばにお願いし、HIV と人権・情報センター関西支部から講師 2 名を派遣していただいた。地域で活動している諸団体と

協働して今後も研修を企画していきたい。

- 6) 大阪エイズウィーク 2014 のイベント企画・実施
イベントタイトルは「地域で取り組む HIV 看護
予防からケアまで」で、DVD の上映の合間に、お
つきあいのマナーかるたを用いたゲームやディス
カッションシートを用いた話し合いをおこない、
楽しく必要な知識をゲットできる機会を提供した。
- 7) 養護教諭対象の講演会・研修会の実施、DVD 教材
の配布を行なった。

大阪府立高等学校養護教諭部会の幹事長に視聴
していただき、幹事会・役員会で検討の結果、大
阪府内の全高等学校、全支援学校に配布すること
を決定された。その後、大阪府立高等学校養護教
諭部会の 9 つの地区と支援学校部会を通して、平
成 26 年 9 月～11 月に配布された。

11 月に大阪私立学校保健大会において、「自分
を大切に生と性の教育」、12 月に大阪府立高
等学校養護教諭研究会、支援学校部会講演会にお
いて、「さまざまな病気や障がいを持つ子どもたち
の『性』を考える」というテーマで講演をおこな
い、私立学校・支援学校との連携を継続したい。

考察

1) 公益社団法人大阪府看護協会との協働

大阪府看護協会は HIV 感染について社会が混乱
していた早期から HIV 看護への取り組み、HIV 陽
性者への訪問看護を含めて重点課題に挙げていた。
研究協力者として会長・専務理事・教育部教員が
入り、班会議・ネットワーク会議・HIV サポート
リーダー養成研修などをバックアップしていただ
き、支部理事会を通して各支部への情報伝達のラ
インが機能している。

HIV 診療拠点病院ではなく、HIV 専門医がいなく
ても HIV 検査をしている限り、初期対応ができる
ことを目標に今後も研修を継続し、看護職のボト
ムアップを図る。看護職対象の院内研修について
は、将来的には拠点病院の看護職が自施設や地域
の病院・クリニックを対象に研修を実施できるよ
うに進めたい。

2) HIV 感染予防 高等学校での出前講義の実際

高等学校の近くにある病院に勤務する看護師が
講演をおこなうことは、高校生にとって看護とい
う職業を知る機会にもなり、講師を務める看護師
にとっても「看護のやりがい・満足・達成感」を
もたらし、健康な高校生との関わりは看護観の広
がりや深まりにもつながっている。

高校生への出前講座については、現在 15 校でお
こなっているが、さらに実施校を増加できるよう
に、講師の養成に力を入れたい。

結論

- ① HIV サポートリーダー養成研修は、今後も 6 月
末・10 月末に実施し、看護職・養護教諭・看護学
部生・介護職の参加を促進し、受講対象を、大阪
府から近畿ブロック・全国に拡大することが必要
である。
- ② 大阪 HIV ナースネットワーク会議を 7 月・11 月
に開催し、HIV サポートリーダー養成研修修了生
のフォローアップと症例検討やプロジェクトチ
ーム活動についての相談の場として活性化するこ
とができた。
- ③ 養護教諭を対象に、DVD 教材『養護教諭として
知っておきたい 10 のこと』を使用した研修が今後
必要である。
- ④ 高校生への出前講義を引き続き実施し、大阪府
教育委員会との連携強化をはかった。
- ⑤ 介護職向けの DVD 教材を使用し、介護支援専門
員研修で使用する。介護福祉施設で勤務する看護
職への教育・研修について企画・実施することが
重要である。
- ⑥ (公社)大阪府看護協会、大阪府内 HIV 診療拠
点病院、大阪府健康医療部 保健医療室 医療対
策課 感染症グループなどとの連携を強化し、上
記①～⑤を推進することが今後の課題である。

健康危険情報

該当なし

知的財産権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

1. 論文発表

佐保美奈子：病院職員対象の人権研修において、HIV/AIDS を取り上げる意義、人権教育研究 (14) : 119-124、2014 年

佐保美奈子、古山美穂、椿知恵、山田加奈子：高校生の発達段階に応じたデートバイオレンス予防についての出前講義の試み～おつきあいのマナーかるた、ディスカッションシートを使用して～、大阪母性衛生雑誌、Vol. 50 No. 1、31-34、2014 年

椿知恵、山田加奈子、古山美穂、佐保美奈子：勤務看護職の高校生への出張による性教育活動ー「体験」から考える、活動継続への支援ー、日本看護学会論文集、44 号、361-364、2014 年

2. 学会発表

Yamada K, Saho M, Furuyama M, Tsubaki C : Measures to Train HIV Support Leaders in Osaka, Japan. The 35th International Conference of Human Caring in Kyoto, May 2014

Yamada K, Saho M, Furuyama M, Tsubaki C : Safe Dating Program for High School Students. The 35th International Conference of Human Caring in Kyoto, May 2014

山田加奈子、椿知恵、古山美穂、佐保美奈子、吉田朋未、宮川祐三子：看護職者が高校生に伝えたいセクシュアリティ、恋愛、結婚に関する価値観。第 55 回日本母性衛生学会学術集会(千葉)、2014 年 9 月

古山美穂、佐保美奈子、山田加奈子、椿知恵、吉田朋未、宮川祐三子：知情意を育む工夫を凝らした性教育実践と高校生の評価。第 55 回日本母性衛生学会学術集会(千葉)、2014 年 9 月

佐保美奈子：地域 HIV 看護の質の向上に関する研究 6 年間の取り組み。エイズ予防財団 研究成果発表会、2014 年 11 月

佐保美奈子、古山美穂、山田加奈子、椿知恵、工藤里香：大阪 HIV ナースネットワーク会議からの提言。第 28 回日本エイズ学会(大阪)、2014 年 12 月

佐保美奈子、古山美穂、山田加奈子、椿知恵、工藤里香：HIV サポートリーダー養成研修の課題と展望。第 28 回日本エイズ学会(大阪)、2014 年 12 月

HIV サポートリーダー養成研修のまとめ

平成 26 年 1 月 6 日
佐保美奈子

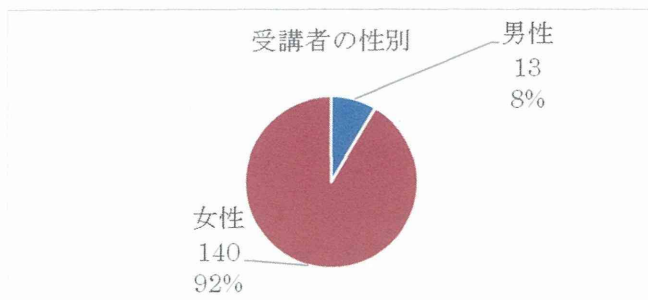
1. 受講人数

- 第 1 回 18 名
- 第 2 回 10 名 (内、看護学部生 3 名)
- 第 3 回 11 名 (内、看護学部生 1 名)
- 第 4 回 16 名 (内、養護教諭 1 名)
- 第 5 回 20 名 (内、看護学部生 8 名)
- 第 6 回 22 名
- 第 7 回 18 名 (内、看護学部生 5 名)
- 第 8 回 12 名
- 第 9 回 26 名 (内、看護学部生 5 名)
- 合計 153 名

2. 受講生の職種

看護師	73
助産師	50
学生	22
保健師	6
養護教諭	2

3. 受講生の性別

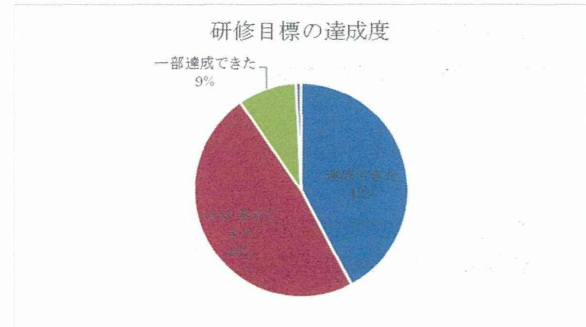


4. 調査票の回収数

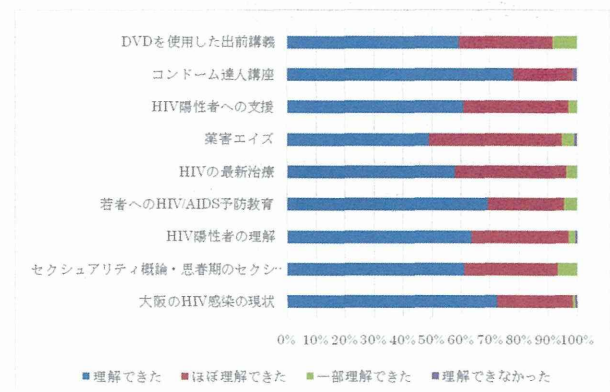
参加者 153 名 回収数 135 回収率 88.2%

5. 研修目標の達成度

研修目標: セクシュアリティ、HIV 感染症について広く学び、HIV 陽性者への初期対応、高校生への HIV 予防出前講義に必要な態度・知識・技術を得る



6. 講義別理解度



7. 態度の変化

